宮城県文化財調査報告書第224集

一里塚遺跡

平成22年3月

宮城県教育委員会

宮城県文化財調査報告書第224集
一里塚遺跡
平成二十二年三月
宮城県教育委員会

一 里 塚 遺 跡

序　　文

ゆとりや豊かさを目指すことが重要になってきたなかで、地域住民の間では身近な地域の個性豊かな風土や歴史的な文化財の保存・活用の取り組みへの気運が高まっています。

しかし、一方では道路建設や宅地造成など都市化の波が地方にも押し寄せ、高規格道路の建設や大規模な工業団地造成などの各種開発事業も年を追うごとに増加しており、文化財は年々破壊され、消滅の危機にさらされることが多くなってきております。なかでも土地との結びつきの強い埋蔵文化財は、各種の開発により常に破壊される恐れがあることから、当教育委員会では開発部局等に遺跡の所在を周知徹底するとともに、開発との関わりが生じた場合には貴重な文化財を積極的に保護することに努めてきております。

本書は宮城県黒川高等学校産業施設整備事業計画による実習棟建設工事に先立って実施した一里塚遺跡の発掘調査報告書です。本書が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、遺跡の保存に理解を示され、発掘調査に際しては多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際の調査にあたられた皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成 22 年 3 月

宮城県教育委員会

教育長　小　林　伸　一

例　　言

1．本書は、宮城県黒川高等学校実習棟建設に伴う「一里塚遺跡」の発掘調査報告書である。

2．「一里塚遺跡」発掘調査の調査要項は下記の通りである。

遺 跡 名：一里塚遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：23019）

遺跡記号：ＫＪ

所 在 地：宮城県黒川郡大和町吉岡字東柴崎

調査原因：宮城県黒川高等学校実習棟建設工事

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課、大和町教育委員会（確認調査）

調 査 員：確認調査　藤井裕二（大和町教育委員会）

事前調査　豊村幸宏　尾形祐之　古田和誠

調査期間：確認調査　平成 21 年 7 月 10 日～ 22 日

事前調査　平成 21 年 10 月 19 日～ 12 月 4 日

調査面積：確認調査　約 337㎡（対象面積：約 1,000㎡）

事前調査　約 968㎡（対象面積：968㎡）

調査協力：大和町教育委員会

3．発掘調査および資料整理、報告書の作成に際しては、以下の個人及び機関からご指導・ご助言、ご協力を賜った（敬称略）。

村田晃一（東北歴史博物館）　宮城県黒川高等学校

4．本書の第 2 図は、国土交通省国土地理院発行の「七ツ森」「吉岡」「根白石」「富谷」（1/25,000）の地形図を複製して使用した。また、第 3・4・12 図は「仙塩広域都市計画図」（1/2,500）を複製して使用した。

5．測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第Ｘ系による。測量原点は「Ⅲ．発掘調査」に示した。

6．本書で使用した遺構略号は以下の通りである。遺構番号は、遺構の種別に関わらず、資料整理の際に付した通し番号を用いている。

ＳＢ：掘立柱建物跡　ＳＡ：柱穴列　ＳＫ：土坑　ＳＤ：溝跡　Ｐ：ピット

7．遺構平面図にはそれぞれスケールを付しているが、縮尺は原則として以下の通りである。

遺構配置図 1/200　柱穴列・土坑・溝跡断面 1/60　柱穴断面 1/40

なお、掘立柱建物跡については模式図（縮尺：1/400）で表示している。模式図は北を上にしており、柱痕跡があるものは●、柱痕跡が発見されなかった柱穴は○で示している。模式図中の数字は、柱間寸法を示している。

8．建物跡の柱穴は、北西隅の位置にある柱穴を基準とする。例えば、Ｎ２Ｗ３柱穴は北側柱列から２間目、西側柱列から３間目に位置する柱穴を表している。

9．土色の記述にあたっては、『新版　標準土色帖　1994 年版』（小山・竹原 1994）を用いている。

10. 遺物図版にはそれぞれスケールを付しているが、縮尺はいずれも 1/3 である。

11. 本書の出土遺物のうち、土師器については、成形にロクロを使用したものをロクロ調整、ロクロを使用していないものを非ロクロ調整と呼んでいる。なお遺物実測図では、土師器黒色処理・土器漆皮膜・把手剥落の場合にはスクリーン・トーンを貼って区別している。

12. 本書の遺物の整理は、尾形祐之、豊村幸宏、古田和誠、木村奈保美、千葉栄子、長沼雅子が行い、遺物のトレース、及び遺構の整理・トレースは尾形が行った。

13. 本書の執筆は、調査者全員の協議・検討を経て、尾形が行った。

14. 発掘調査の記録や出土遺物は、宮城県教育委員会が保管している。

目　　次

Ⅰ．はじめに…… 1

　1．遺跡の位置と地理的環境…… 1

　2．周辺の遺跡…… 1

　3．これまでの調査成果…… 3

Ⅱ．調査に至る経緯と調査方法…… 3

　1．調査に至る経緯…… 3

　2．調査の方法…… 3

Ⅲ．発掘調査…… 5

　1．検出状況…… 5

　2．検出した遺構と遺物…… 6

　　(1) 掘立柱建物跡　(2) 柱穴列　(3) 土坑　(4) 溝跡　(5) ピット

Ⅳ．まとめ……18

　1．遺物について……18

　2．遺構について……20

　　(1) 特徴　　(2) 変遷　　(3) 年代・性格

引用・参考文献

写真図版

報告書抄録

Ⅰ．はじめに

１．遺跡の位置と地理的環境

一里塚遺跡は、黒川郡大和町吉岡東～吉岡字東柴崎に所在し、大和町吉岡の中心部から南東へ約 1㎞離れ、国道４号線の東側に位置している（第１図・第２図）。この遺跡は、東西方向に延びる町北部の大衡丘陵、南部の富谷丘陵を開析しながら、東へ蛇行して流れる吉田川とその支流である善川との合流地点に、舌状に張り出す標高 16 ～ 20m ほどの河岸段丘面上に立地している。この段丘面は緩やかに南東方向へ傾斜しており、遺跡の東側は吉田川低地へと連なっている。

第1図　一里塚遺跡の位置

遺跡の範囲は東西約 1.1㎞、南北約 0.9㎞、面積約 40ha にも及ぶ広大なものである。遺跡の大部分は、かつては宅地や水田地帯であったが、近年の土地区画整理によって、現況は大半が宅地や店舗、工場などで占められている。遺跡の時期は、旧石器時代、縄文時代、古墳時代後期～中・近世にわたるが、中心は飛鳥～奈良・平安時代の古代である。

２．周辺の遺跡

一里塚遺跡の周辺には、旧石器時代以降の数多くの遺跡が分布している（第２図）。ここでは一里塚遺跡の中心である古代の周辺遺跡について概観する。

奈良・平安時代の集落跡では、大和町中峯Ａ・中峯Ｃ遺跡がある。中峯Ａ遺跡では９世紀中葉から 10 世紀初頭頃の掘立柱建物跡５棟、竪穴住居跡 17 軒、中峯Ｃ遺跡では掘立柱建物跡１棟、竪穴住居跡３軒、焼土遺構３基が検出されている（藤沼・菊地・小川 1985）。また大衡村亀岡遺跡では、９世紀初頭前後の掘立柱建物跡、竪穴住居跡、土器焼成遺構などが検出されているが、掘立柱建物跡の存在や遺物の特徴から須恵器製作集団と密接な関わりをもった集落、もしくは官衙に関わる施設の可能性が指摘されている（村田 1995a）。大衡村旧大衡役場前遺跡では、掘立柱建物跡１棟、竪穴状遺構１基、土坑２基などが検出され、鉄鏃などの鉄製品が出土している（佐藤・小野 2007）。

窯跡は黒川郡内に多く認められる。大和町鳥屋窯跡群の調査では、８世紀前半から８世紀中頃に位置づけられる須恵器が出土している（東北学院大学考古学研究部 1975）。大衡村大衡窯跡群は８世紀中葉から９世紀後半にかけて須恵器を生産していた窯跡群であるが、大衡村萱刈場窯跡Ａ地点（村田 1995b）と大衡村彦右ェ門橋窯跡（真山 1989、高橋 1996、佐藤 1997）で一部の調査が行われている。

その他の生産遺跡としては、一里塚遺跡の西隣にある大和町天皇寺遺跡において、平安時代の製鉄炉２基が検出されている（斎藤 1990）。大衡村寺沢西遺跡では、８世紀中葉から９世紀代の竪穴住居跡の堆積土から鉄滓、鍛造剥片が出土しており、小規模な精錬・鍛冶作業が行われていた可能性が考えられている（村上・志間・尾形 2009）。また大衡村奥田金沢遺跡でも、鉄滓類がまとまって出土し

No.	遺　跡　名	種　別	時　　代	No.	遺　跡　名	種　別	時　　代	No.	遺　跡　名	種　別	時　　代
1	**一里塚遺跡**	**集落・官衙**	旧石器、縄文、古墳後～中世	19	吉岡城跡	城館	近世	37	鳥屋窯跡	窯跡	奈良
2	中峯 A 遺跡	集落	縄文、平安	20	下草古城跡	集落・城館	古墳、平安、中世、近世	38	大崎窯跡	窯跡	古代
3	中峯 B 遺跡	集落	縄文早～中、弥生、平安	21	塚越遺跡	散布地	古代	39	奥州街道･大衡一里塚	街道･一里塚	近世
4	中峯 C 遺跡	集落	平安	22	熊野遺跡	散布地	古代	40	寺東遺跡	散布地	古代
5	北目大崎古墳	古墳	古墳	23	古川遺跡	散布地	古代	41	迫遺跡	散布地	古代
6	糸繰遺跡	散布地	縄文、古代	24	車遺跡	散布地	古代	42	寺沢遺跡	散布地	古代
7	天皇寺遺跡	集落・製鉄	縄文、平安、近世	25	石神沢遺跡	散布地	縄文晩、平安	43	寺沢西遺跡	散布地･製鉄	縄文早・後、古代
8	加美山遺跡	散布地	平安	26	大沢遺跡	散布地	古代	44	亀岡遺跡	官衙関連集落?	縄文早・晩、古代
9	相川堤防遺跡	散布地	縄文、古代	27	東熊野堂遺跡	散布地	縄文、古代	45	亀岡古墳	古墳	古墳
10	要害遺跡	散布地	縄文、弥生、古代	28	岩下遺跡	散布地	古代	46	奥田金沢遺跡	散布地･製鉄	縄文早～後、古代
11	要害館跡	城館	中世、近世	29	信楽寺跡	寺院	中世	47	平林遺跡	散布地	縄文、古代、中世、近世
12	御所館跡	城館	中世	30	鳥屋八幡古墳	円墳	古墳後	48	駒場館跡	城館	中世
13	上舞野 A 遺跡	散布地	縄文、古代	31	鶴巣城跡	城館	中世	49	大衡城跡	城館･散布地	縄文、中世
14	上舞野 B 遺跡	散布地	古代	32	観音堂小塚群	小塚	中世、近世	50	古城館跡	城館	中世
15	八谷館跡	古墳・城館	古墳、中世	33	天神館跡	散布地･城館	縄文、中世	51	梅木遺跡	集落･居宅	縄文早～中、古代、近世
16	新田古墳(1.2 号墳)	古墳	古墳	34	別所横穴墓群	横穴墓	古墳	52	馳取城跡	城館	中世
17	新田古墳(3 号墳)	円墳	古墳	35	勝負沢遺跡	散布地	縄文前・中、平安	53	門前城跡	城館	中世
18	一里塚	一里塚	近世	36	日光山遺跡	墓･祭祀遺跡	奈良、平安、中世、近世	54	館山経塚	経塚	室町

第2図　一里塚遺跡と周辺の遺跡

ている（村上・志間・尾形 2009）。

３．これまでの調査成果

これまで土地区画整理事業に伴って、1988 年度から 1994 年度までの 7 年間にわたり、延べ約 60,000㎡が調査されている（第 3 図）（手塚・加藤 1989、手塚・加藤・岩見 1990、三好・藤村 1999、佐久間・山田・吉野 2003）。この結果、古代黒川郡の成立にかかわった関東地域からの移民の集落ではないかと考えられる 7 世紀末から 8 世紀前半の環濠集落、8 世紀後半から 9 世紀初頭の黒川郡衙の「正倉院」とみられる区画施設を伴った掘立柱建物群、その西側に位置する 7 世紀末から 9 世紀の竪穴住居群と小規模な掘立柱建物群の存在が明らかになっている。平成 8 年 5 月には、「正倉院」とみられる一画が県史跡に指定され、「吉岡東官衙遺跡」として登録された。

Ⅱ．調査に至る経緯と調査方法

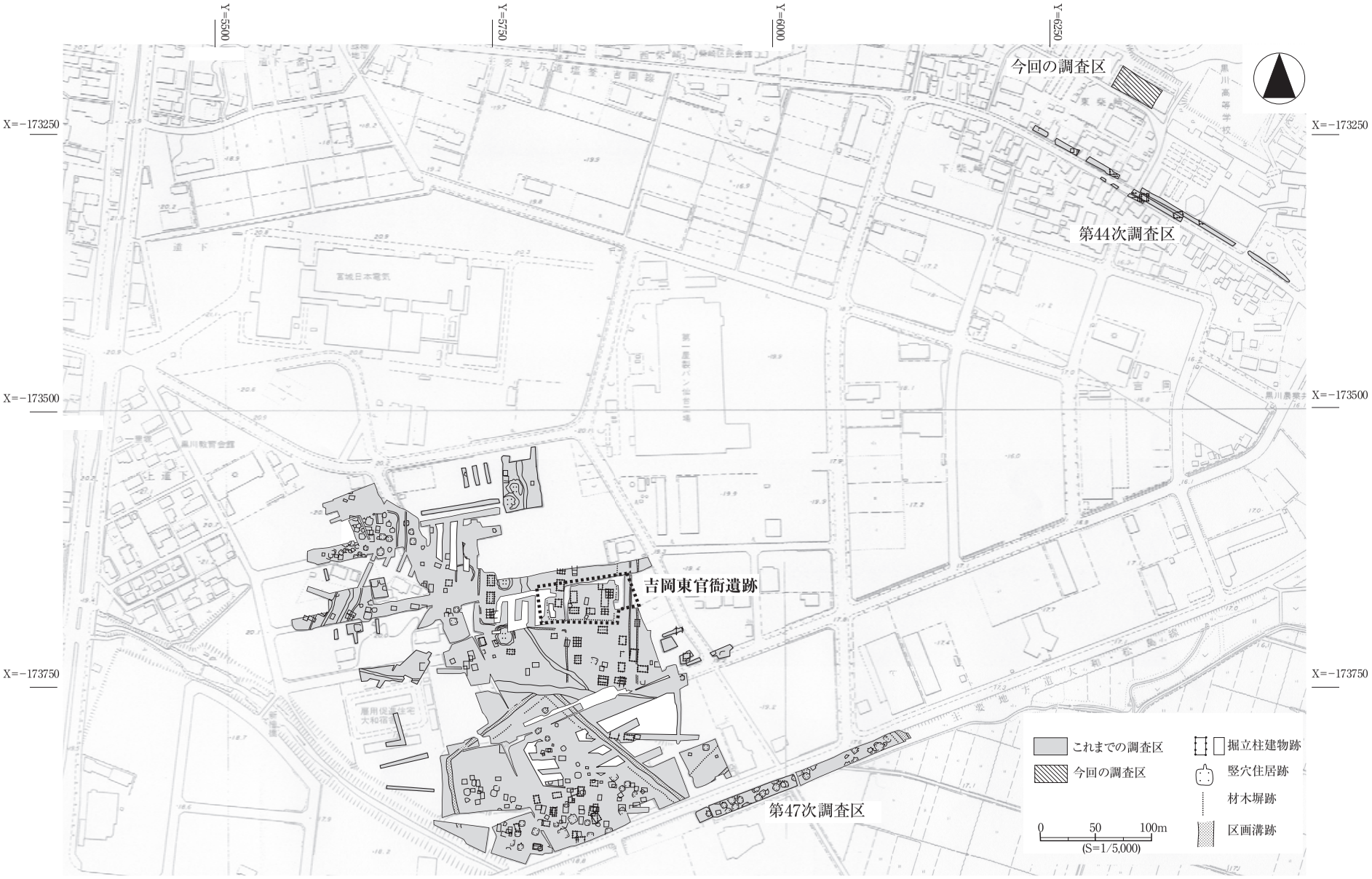
１．調査に至る経緯

本書は宮城県黒川高等学校産業施設整備事業計画による実習棟建設工事に伴って平成 21 年度に実施した大和町一里塚遺跡の発掘調査報告書である。この工事は平成 3 年まで高校体育館が建っていた学校敷地内に、新たに実習棟を建設するものである。建設予定地が周知の遺跡である一里塚遺跡内であることから、平成 20 年度に事業を担当する宮城県教育庁施設整備課と宮城県教育委員会文化財保護課、大和町教育委員会、宮城県黒川高等学校などの関係機関が協議を行い、まず確認調査を実施し、その結果に基づいて再協議することとした。確認調査は大和町教育委員会が主体となり、平成 21 年 7 月 10 日～ 22 日に実施した。建設予定地において、8 本のトレンチ（合計約 337㎡）を設定し調査を行った結果（第 4 図）、体育館の基礎により広範囲にわたって撹乱されていることが明らかになったが、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、土坑、溝跡、焼土遺構などが発見された。特に、建設予定地の東側に遺構が多いことが判明した。これを受け、関係機関が再度協議を行ったが、建設位置を別地点に計画変更するのは困難であったことから、事前調査の実施を決定し、平成 21 年 10 月 19 日から調査を開始した。ただし、確認調査の結果、建設予定地の西側の方が比較的遺構が少ないとみられたため、可能な限り建設位置を西側に寄せるよう要望し、最終的に当初計画より約 6m 西側に計画変更している。

なお、実習棟建設工事にあわせ、本校舎との連絡通路（渡り廊下）の設置、キュービクル増設等の電気設備工事、上下水道管布設工事等が行われるが、これらについては平成 22 年度に予定されている各工事の際に宮城県教育委員会と大和町教育委員会が立会うこととしている。

２．調査の方法

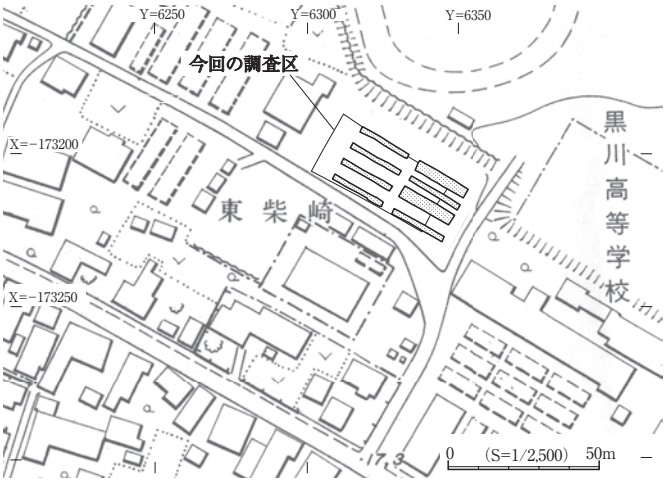
調査は 10 月 19 日から実施した。計画変更により新たに調査範囲になった調査区西側から重機による表土除去を開始した。表土除去と並行して、人力で撹乱の除去と遺構確認を実施した結果、調査区の中央やや西寄りの地点は、体育館の地下室部分があったとみられ、著しく削平されていることが明



第3図　調査区の位置とこれまでの調査区

らかになった。なお、遺構の位置を述べるにあたっては、この部分を境に調査区西側を西半部、東側を東半部とすることにした。

検出遺構は、掘立柱建物跡8棟、柱穴列2条、土坑9基、溝跡3条、ピット58個である（第5図）。すべての遺構の精査・記録を11月30日までに終え、調査区の埋め戻しを12月4日に完了して、一連の調査を終了した。調査面積は968㎡（建物部分:800㎡、犬走り部分:168㎡）である。



第4図　確認調査トレンチの位置

全体の平面図は、電子平板を使用して作成した。平面図作成にあたっての基準点（世界測地系に基づく）は、以下に示す通りである。

BM1	X = − 173187.567	Y = 6312.199
BM2	X = − 173206.922	Y = 6304.816

断面図は縮尺1/20で手実測により作成した。また、写真撮影にはデジタルカメラ（1000万画素）を使用した。なお、調査区内は広範囲にわたって撹乱を受けているため、体育館の基礎部分については、遺構にかかるものについてのみ図面上で示している。また、確認調査の際に検出した遺構のうち、柱穴について図面上で示している。

Ⅲ．発掘調査

1．検出状況

調査地点は体育館の基礎部分や地下室部分のために広範囲にわたって削平・撹乱を受けている。表土及び盛土の厚さは40～50㎝である。遺構検出面は表土層下のにぶい黄褐色シルト質粘土の地山である。地山面は北に向かって緩やかに低くなっており、調査区北西部分では、表土層下に地山漸移層である褐色シルトが、10㎝ほど堆積している。

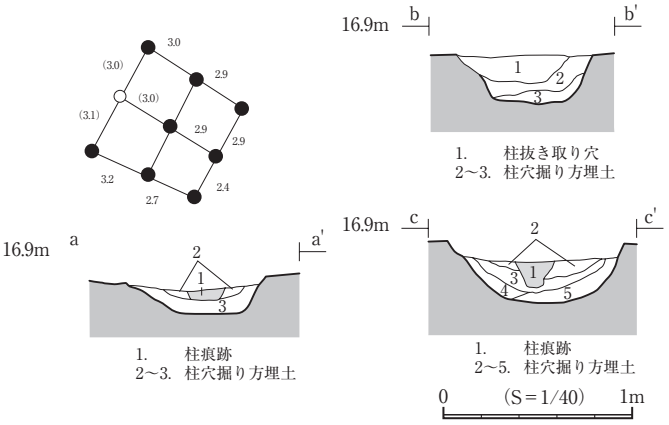
検出した遺構は掘立柱建物跡8棟、柱穴列2条、土坑9基、溝跡3条、ピット58個がある。遺物はおもに土坑、溝跡から土師器、須恵器が出土したほか、撹乱から煙管吸口などが整理用平箱約2箱出土しているが、図示できるものは少ない。

以下遺構ごとに報告する。

２．検出した遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

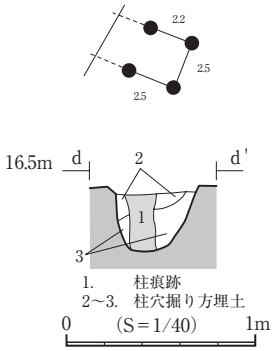
調査区全体にわたり、8 棟の掘立柱建物跡を検出した（ＳＢ1・2・15・17・18・20・21・22 建物跡）。



【ＳＢ１建物跡】

西半部の南側に位置する（第５図、図版２－２、3)。桁行２間、梁行２間の南北棟総柱建物跡とみられる。ＳＡ9 柱穴列と重複しているが、新旧関係は不明である。柱穴は 9 箇所で検出しており、このうち 8 箇所で柱痕跡、1 箇所で柱抜き取り穴を確認している。平面規模は桁行が東側柱列で総長 5.3m、柱間寸法は北から 2.9m、2.4m、梁行が北妻で総長 5.9m、柱間寸法は西から 3.0m、2.9m である。建物方向は東側柱列でみると北で東へ約 29°偏する。柱穴は一辺 60 ～ 90 ㎝の隅丸方形または隅丸長方形を呈し、深さは検出面から 4 ～ 34㎝である。壁は底面から緩やかに立ち上がるものが多い。柱穴掘り方埋土は地山ブロックを多く含む暗褐色シルトである。柱痕跡は径 17 ～ 22㎝の円形である。堆積土は暗褐色シルトである。遺物は出土していない。

【ＳＢ２建物跡】



西半部の北西側に位置する（第５図、図版４－１、2)。桁行１間以上、梁行１間の東西棟とみられ、西側が調査区外に延びている。柱穴は 4 箇所で検出しており、全てで柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が北側柱列で総長 2.2m 以上、梁行が東妻で総長 2.5m である。建物方向は東妻でみると北で東へ約 22°偏する。柱穴は径 33 ～ 62㎝の円形または不整な円形を呈し、深さは検出面から 30 ～ 43㎝である。壁は底面から緩やかに立ち上がる。柱穴掘り方埋土は地山ブロックを多く含む暗褐色シルトである。柱痕跡は径 18㎝の円形である。堆積土は黄褐色シルト、暗褐色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

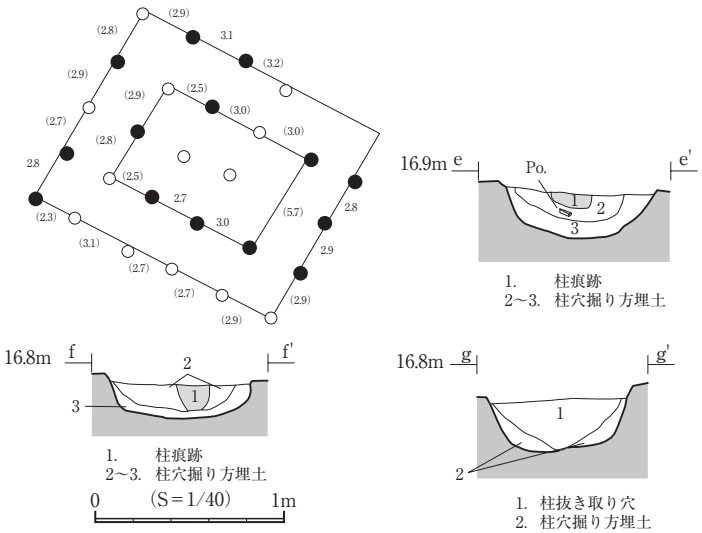
【ＳＢ15 建物跡】

東半部の中央に位置する（第５図、図版３－１～3)。周辺は削平されているが、桁行３間、梁行２間の身舎の四面に廂が付く桁行５間、梁行４間の東西棟とみられる。身舎の棟通り下には床束の柱穴がある。ＳＢ20・21 建物跡、ＳＫ4・7・10・12・13 土坑、ＳＤ5・6 溝跡と重複し、ＳＫ4・7・10・12・13 土坑、ＳＤ5・6 溝跡より新しく、ＳＢ20・21 建物跡よりも古い。またＳＢ22 建物跡、ＳＫ8・11 土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。柱穴は身舎 11 箇所、廂 16 箇所で検出しており、このうち身舎 6 箇所、廂 8 箇所で柱痕跡、身舎 4 箇所、廂 6 箇所で柱抜き取り穴を確認している。平面規模は正確に測り得ないが、抜き取り穴の中心でみると、身舎の桁行が南側柱列で総長約 8.2 m、柱間寸法は西から約 2.5m、2.7m、3.0m で、廂の出が西が約 2.6 m、東が 3.0m である。身舎の梁行が西妻で総長約 5.6m、柱間寸法は北から約 2.9m、約 2.8m で、廂の出が南が約 2.8

Y=6290
Y=6300
Y=6310
Y=6320
Y=6330
Y=6340
Y=6350
X=−173190
X=−173200
X=−173210
X=−173220
X=−173230
SD19
BM1
SB2
SA9
P10
P11
SB18
SB1
BM2
SB21
確認調査トレンチ
SA3
SB15
SB22
SK10
SK14
SK12
SK7
SK13
SD5
SK11
SK8
SD6
SB17
P60
SK4
SB20
SK16
P61
0
(S=1/200)
10m

第5図　遺構配置図

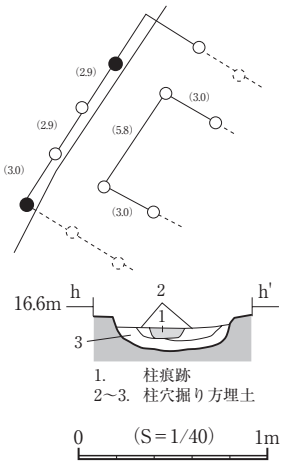
m、北が約 3.0 m である。建物方向は身舎の西妻でみると北で東へ約 28°偏する。柱穴は身舎が一辺 60 ～ 80㎝の隅丸方形または隅丸長方形、廂が一辺 70 ～ 90㎝の隅丸方形または隅丸長方形をそれぞれ呈する。深さは検出面から身舎が 19 ～ 33㎝、廂が 14 ～ 35㎝である。壁はいずれも底面から緩やかに立ち上がるものが多い。柱穴掘り方埋土は身舎、廂ともに地山ブロックを多く含むにぶい黄褐色シルト、暗褐色シルトである。柱痕跡は身舎が径 12 ～ 22㎝の円形、廂が径 14 ～ 18㎝の円形である。堆積土は身舎、廂ともににぶい黄褐色シルト、暗褐色シルトである。



遺物はＮ３Ｗ４柱穴やＮ５Ｗ１柱穴などの掘り方埋土から非ロクロ土師器甕片、ロクロ土師器甕片、須恵器蓋片・甕片が出土している。このうち、非ロクロ土師器甕には外面が被熱により赤変後剥落し、内面にナデが施されているものや、底部に木葉痕が認められるものがある。須恵器甕には、外面に平行タタキが施され、内面に同心円状当て具痕が認められるもの、外面に平行タタキが施され、内面に無文当て具痕の後、ナデが施されているもの、外面に平行タタキが施され、内面に平行当て具痕が認められるもの、外面に手持ちヘラケズリ、内面にナデが施されているものがある。

【ＳＢ17 建物跡】

東半部の調査区東壁際に位置する（第５図、図版３－４、5）。東西１間以上、南北１間の身舎の北・西・南側に廂が付く東西２間以上、南北４間の建物跡とみられ、東側が調査区外に延びている。ＳＤ６溝跡と重複し、これより新しい。確認調査分も含めると、柱穴は身舎４箇所、廂５箇所で検出しており、このうち廂２箇所で柱痕跡、廂２箇所で柱抜き取り穴を確認している。なお確認調査で検出した柱穴については、精査を行っていないため、詳細は不明である。平面規模は正確に測り得ないが、推定で身舎の南側柱列で総長約 3.0 m 以上、廂の出が西が約 3.0 m、西側柱列で総長約 5.8m、廂の出が北が約 2.8 m である。建物方向は身舎の西側柱列でみると北で東へ約 30°偏する。柱穴は身舎が一辺 60 ～ 70㎝の隅丸方形または隅丸長方形、廂が一辺 70 ～ 90㎝の隅丸方形または隅丸長方形をそれぞれ呈する。深さは検出面から廂が 16 ～ 31㎝である。壁は底面から緩やかに立ち上がるものが多い。柱穴掘り方埋土は廂が地山ブロックを多く含む暗褐色シルトである。柱痕跡は廂が径 17 ～ 20㎝の円形である。堆積土は暗褐色シルトで、やや粘性がある。

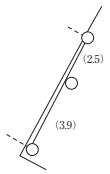


遺物はＮ３Ｗ１柱穴抜き取り穴から非ロクロ土師器甕片が出土しているが、摩滅により調整は不

明である。

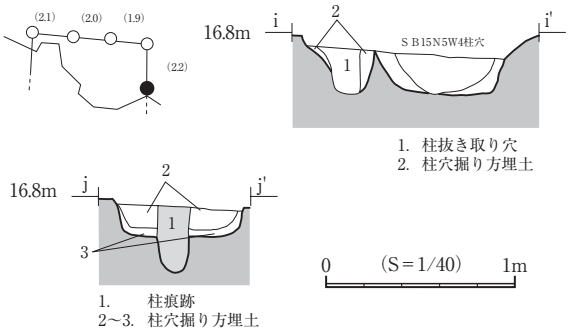
【ＳＢ18 建物跡】

西半部の調査区西壁際に位置する（第５図）。東西１間以上、南北２間の建物跡とみられ、西側が調査区外に延びている。他の遺構との重複はない。柱穴は３箇所で検出しているが、検出が一部であるため、柱痕跡は確認していない。平面規模は正確に測り得ないが、推定で東側柱列で総長約 6.5m、柱間寸法は北から約 2.5m、約 3.9m である。建物方向は東側柱列でみると北で東へ約 27゜偏する。柱穴は一辺 80㎝の隅丸方形を呈するとみられ、深さは検出面から 25 ～ 27㎝である。壁は底面から緩やかに立ち上がる。柱穴掘り方埋土は地山ブロックを多く含む暗褐色シルトである。遺物は出土していない。



【ＳＢ20 建物跡】

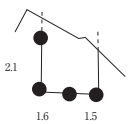
東半部の南西側に位置する（第５図、図版４－３、4）。桁行３間、梁行１間以上の東西棟とみられ、南側は削平のため残っていないが、調査区外に延びている可能性が考えられる。ＳＢ15 建物跡と重複し、これより新しい。柱穴は５箇所で検出しており、このうち１箇所で柱痕跡、４箇所で柱抜き取り穴を確認している。平面規模は桁行については正確に測り得ないが、抜き取り穴の中心でみると、北側柱列で総長約 6.0m、柱間寸法は西から約 2.1m、約 2.0m、約 1.9m、梁行が東妻で総長約 2.2m 以上である。建物方向は東妻でみると北で東へ約１゜偏する。柱穴は径 30㎝の不整な円形、または長軸 70㎝、短軸 30㎝の長楕円形を呈し、深さは検出面から 17㎝である。壁は底面からやや緩やかに立ち上がる。柱穴掘り方埋土は地山ブロックを多く含むにぶい黄褐色シルトである。柱痕跡は径 18㎝の円形である。堆積土は褐色粘土質シルトで、やや粘性がある。



遺物はＮ１Ｗ３柱穴掘り方埋土から須恵器甕片が出土している。外面は平行タタキの後磨消されており、内面には同心円状当て具痕が認められる。

【ＳＢ21 建物跡】

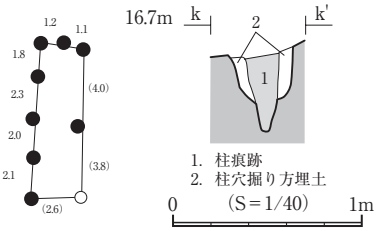
東半部の北西側に位置する（第５図、図版４－５、6）。桁行１間以上、梁行２間の南北棟で、北側は削平のため残っていないが、調査区外に延びている可能性が考えられる。ＳＢ15 建物跡と重複し、これより新しい。柱穴は４箇所で検出しており、全てで柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が西側柱列で総長 2.1m 以上、梁行が南妻で総長 3.1m、柱間寸法は西から 1.6m、1.5m である。建物方向は西側柱列でみると北で東へ約２゜偏する。柱穴は径 22 ～ 26㎝の円形、または不整な円形を呈する。壁は底面からやや緩やかに立ち上がる。柱穴掘り方埋土は地山ブロックを多く含む褐色粘土質シルトである。柱痕跡は径 10 ～ 13㎝の円形である。堆積土は褐色粘土質シルトで、やや粘性がある。



遺物はＮ２Ｗ１柱穴柱痕跡から土師器坏片が出土しているが、摩滅により調整は不明である。

【ＳＢ22 建物跡】

東半部の中央に位置する（第５図、図版４－７、8）。桁行４間、梁行２間（南妻では１間）の南北棟である。ＳＤ５溝跡と重複し、これより新しい。またＳＢ15 建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。柱穴は９箇所で検出しており、このうち８箇所で柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が西側柱列で総長8.3m、柱間寸法は北から 1.8m、2.3m、2.0m、2.1m、梁行が北妻で総長 2.3m、柱間寸法は西から 1.2m、1.1m である。建物方向は西側柱列でみると北で東へ約４°偏する。柱穴は径 30㎝の円形、または一辺 30 ～ 40㎝の不整な方形を呈し、深さは検出面から 33 ～ 46㎝である。壁は底面からやや緩やかに立ち上がる。柱穴掘り方埋土は地山ブロックを多く含む褐色シルト、暗褐色シルトである。柱痕跡は径 10 ～ 16㎝の円形である。堆積土は褐色シルト、暗褐色シルトで、やや粘性がある。



遺物はＮ１Ｗ１柱穴柱痕跡から須恵器鉢片が出土している。外面は体下部に手持ちヘラケズリが施されている。内面に灰かぶりが認められる。

(2) 柱穴列

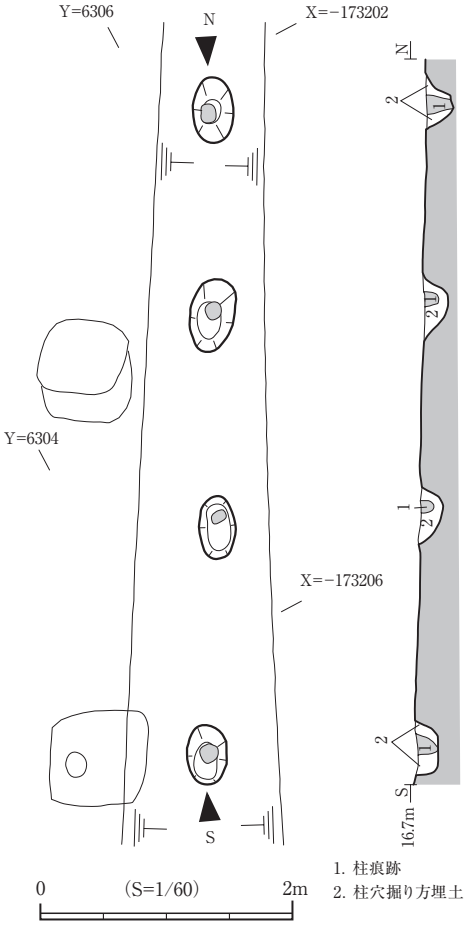
確認調査の北東側トレンチで１条（ＳＡ3 柱穴列)、西半部で１条（ＳＡ9 柱穴列）をそれぞれ検出した。

【ＳＡ３柱穴列】

東半部の北側に位置する確認調査の北東側トレンチで検出した（第５図)。柱穴６個からなる東西５間分の柱穴列である。なお調査区外のため未調査である北側に柱列が展開し、掘立柱建物跡になる可能性もある。他の遺構との重複はない。総長は 14.2m、柱間寸法は西から約 3.0 m、約 2.6 m、約 3.2 m、約 3.2 m、約 2.0 m である。方向は東で南へ約27°偏する。柱穴は一辺60㎝の隅丸方形を呈するが、精査を行っていないため、詳細については不明である。

【ＳＡ９柱穴列】

西半部の南側に位置する（第６図、図版２－２、4)。柱穴４個からなる南北３間の柱穴列である。ＳＢ1 建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。全てで柱痕跡を確認している。総長は 5.6 m、柱間寸法は北から 1.5 m、1.6 m、1.9 m である。方向は北で東へ約 28°偏する。柱穴は長軸 44 ～ 57㎝、短軸 29 ～ 35㎝の長楕円形を呈し、深さは検出面から 18 ～ 23㎝である。壁は底面から緩やかに立ち上がる。柱穴掘り方埋土は地山ブロックを主体とするに



第6図　SA9柱穴列

ぶい黄褐色シルトである。柱痕跡は径 12 ～ 17㎝の円形、または一辺 12cm の隅丸方形を呈する。堆積土は灰黄褐色シルトである。遺物は出土していない。

(3) 土坑

東半部で 9 基検出した（SK4・7・8・10・11・12・13・14・16 土坑)。このうち、7 基が東半部南西寄りの位置に集中している。

【SK4 土坑】

東半部の中央に位置する（第 7 図)。北側は削平のため残っていない。SB15 建物跡、SD5 溝跡、P 133 と重複し、これらより古い。平面形は不整な方形を呈し、規模は長軸 130㎝以上、短軸 110㎝である。深さは検出面から 8㎝である。断面形は浅い皿状である。壁は底面から緩やかに立ち上がり、底面は凸凹があるが、ほぼ平坦である。堆積土は地山ブロックを多く含むにぶい黄褐色シルト質粘土で、人為的埋土である。遺物は出土していない。

【SK7 土坑】

東半部の南西側に位置する（第 7 図、図版 5 － 1)。北西側は削平のため残っていない。SB15 建物跡と重複し、これより古い。平面形は長楕円形を呈するとみられ、大きさは長軸 109㎝、短軸 60㎝以上である。深さは検出面から 7㎝である。断面形は浅い皿状である。壁は底面から緩やかに立ち上がり、底面は凸凹があるが、ほぼ平坦である。堆積土は 2 層に分けられる。1 層は焼土粒や木炭粒を含む暗褐色シルト、2 層は地山ブロックを含むにぶい黄褐色粘土で、いずれも人為的埋土である。

遺物は堆積土から須恵器蓋（第 9 図－ 5)・壺または甕片・甕片が出土している。このうち、須恵器蓋（第 9 図－ 5）は天井部に回転ヘラケズリにより再調整されている。つまみは扁平な擬宝珠形である。内面には使用痕が認められる。須恵器甕は外面は平行タタキの後磨消されており、内面には無文当て具痕が認められる。胎土には海綿骨針が含まれている。

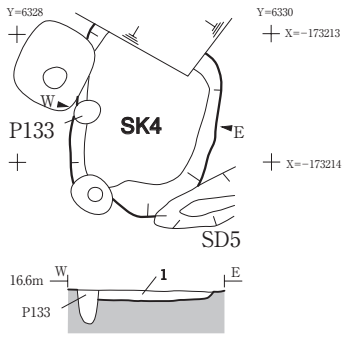
【SK8 土坑】

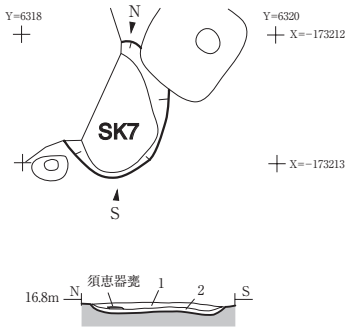
東半部の南西側に位置する（第 7 図、図版 5 － 2)。SK11 土坑、P123 と重複し、これらより古い。またSB15 建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は不整な円形を呈し、規模は長径 140㎝、短径 110㎝である。深さは検出面から最大 42㎝である。断面形は不整な U 字形を呈する。残存する東壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。底面は凹凸があり、中央に向かって緩やかに傾斜している。堆積土は 3 層に分けられる。1 層は焼土粒や木炭粒を含む暗褐色シルト、2 層は地山ブロックを多く含む暗褐色シルト、3 層は地山ブロックを含むにぶい黄褐色粘土質シルトである。1 層は人為的埋土、2 層は崩落土、3 層は機能時の自然堆積である。

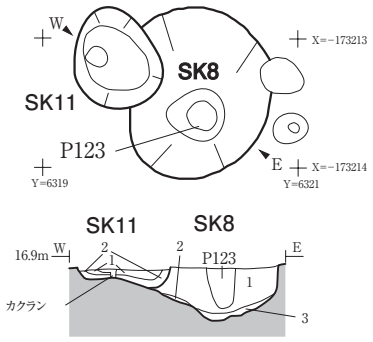
遺物は堆積土から非ロクロ土師器甕片、須恵器蓋片・壺片が出土している。このうち、非ロクロ土師器甕の口縁部には内外面にヨコナデが施されているものがある。須恵器蓋の胎土には海綿骨針が含まれている。

【SK10 土坑】

東半部の中央に位置する（第 7 図、図版 5 － 3、4)。北西側は削平を受けている。SB15 建物跡







SK 4

層	土　　色	土　性	備　　考
1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト質粘土	地山ブロックを多く含む。人為堆積。

SK 7

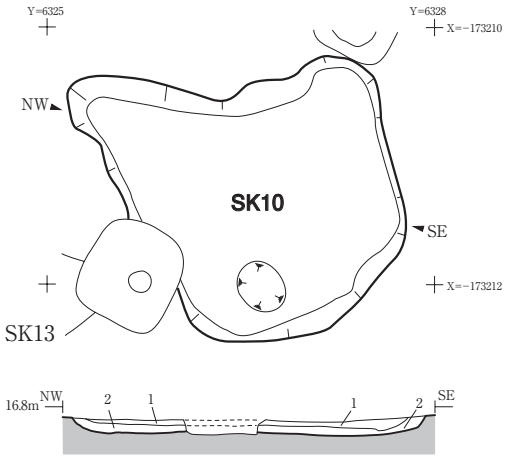
層	土　　色	土　性	備　　考
1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	焼土粒・木炭粒を含む。人為堆積。
2	にぶい黄褐色（10YR5/3）	粘土	地山ブロックを含む。人為堆積。

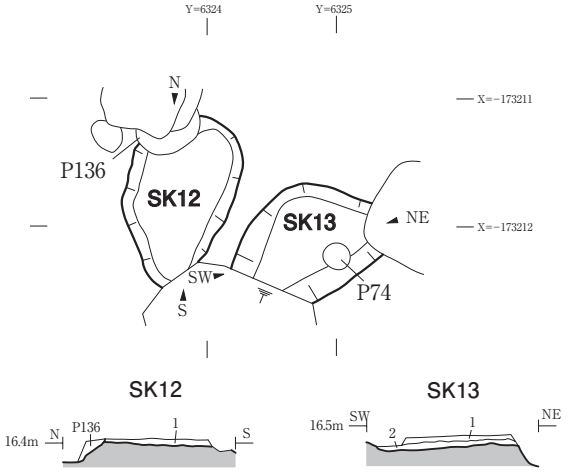
SK 8

層	土　　色	土　性	備　　考
1	暗褐色（10YR3/4）	シルト	焼土粒・木炭粒を含む。人為堆積。
2	暗褐色（10YR3/4）	シルト	地山ブロックを多く含む。崩落土。
3	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	地山ブロックを含む。機能時の自然堆積。

SK 11

層	土　　色	土　性	備　　考
1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	地山ブロックを含む。人為堆積。
2	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	地山ブロックを多く含む。人為堆積。





SK 10

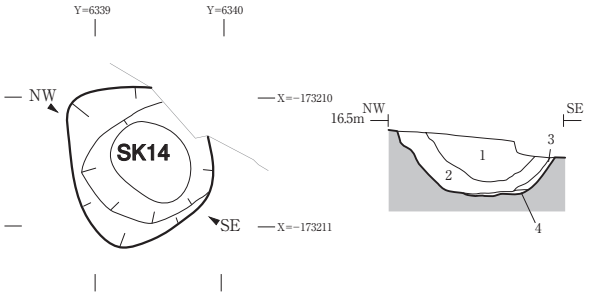
層	土　　色	土　性	備　　考
1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	焼土粒・木炭粒を含む。人為堆積。
2	にぶい黄褐色（10YR5/3）	シルト質粘土	地山ブロックを含む。人為堆積。

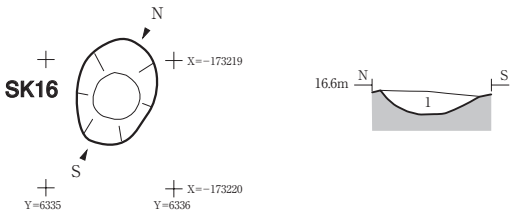
SK 12

層	土　　色	土　性	備　　考
1	暗褐色（10YR3/4）	シルト	焼土粒・地山ブロックを含む。人為堆積。

SK 13

層	土　　色	土　性	備　　考
1	暗褐色（10YR3/4）	シルト	焼土粒・地山ブロックを含む。人為堆積。
2	暗褐色（10YR3/4）	シルト	地山ブロックを多く含む。人為堆積。





SK 14

層	土　　色	土　性	備　　考
1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	焼土粒･地山ブロックをわずかに含む。人為堆積。
2	にぶい黄褐色（10YR5/4）	粘土質シルト	地山ブロックを多く含む。人為堆積。
3	明黄褐色（10YR6/6）	粘土	崩落土。
4	灰黄褐色（10YR5/2）	粘土	酸化鉄を層状に含む。機能時の自然堆積。

SK 16

層	土　　色	土　性	備　　考
1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	焼土粒･木炭粒･地山ブロックを含む。人為堆積。

0　（S=1/60）　2m

第7図　土坑平面図・断面図

と重複し、これより古い。平面形は不整な方形を呈し、規模は一辺約 210㎝である。深さは検出面から 11㎝である。断面形は浅い皿状である。壁は底面から緩やかに立ち上がり、底面は凸凹があるが、ほぼ平坦である。堆積土は 2 層に分けられる。1 層は焼土粒や木炭粒を含む暗褐色シルト、2 層は地山ブロックを含むにぶい黄褐色シルト質粘土で、いずれも人為的埋土である。

遺物は堆積土から非ロクロ土師器甕片、須恵器蓋（第 9 図－ 6）が出土している。非ロクロ土師器甕は内外面が摩滅しているが、内面にヘラナデが施されている。須恵器蓋（第 9 図－ 6）は天井部に回転ヘラケズリにより再調整されている。つまみは擬宝珠形である。

【SK 11 土坑】

東半部の南西側に位置する（第 7 図、図版 5 － 2）。SK8 土坑と重複し、これより新しい。平面形は不整な円形を呈し、規模は長径 80㎝、短径 68㎝である。深さは検出面から最大 16㎝である。断面形は上幅が広い不整な台形状である。壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は西側から中央までは平坦であるが、東側に向かって低く傾斜している。堆積土は 2 層に分けられる。1 層は地山ブロックを含む暗褐色シルト、2 層は地山ブロックを多く含むにぶい黄褐色シルトで、いずれも人為的埋土である。遺物は出土していない。

【SK 12 土坑】

東半部中央のやや南西寄りに位置する（第 7 図）。南側は削平のため、残っていない。SB15 建物跡、P136 と重複し、これらより古い。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸 90㎝以上、短軸 82㎝である。深さは検出面から 6㎝である。断面形は浅い皿状である。壁は底面から緩やかに立ち上がり、底面は南側に向かって緩やかに傾斜している。堆積土は焼土粒や地山ブロックを含む暗褐色シルトで、人為的埋土である。

遺物は堆積土から非ロクロ土師器坏片、ロクロ土師器甕片が出土している。非ロクロ土師器坏は外面に手持ちヘラケズリが施され、内面はヘラミガキの後黒色処理されている。ロクロ土師器甕は外面が摩滅しているが、内面にヘラナデが施されている。

【SK 13 土坑】

東半部中央のやや南西寄りに位置する（第 7 図）。南側は削平のため、残っていない。SB15 建物跡、P74 と重複し、これらより古い。平面形は不整な長方形を呈し、規模は長軸 92㎝以上、短軸 90㎝である。深さは検出面から 11㎝である。断面形は浅い皿状である。壁は底面から緩やかに立ち上がり、底面は凸凹があるが、ほぼ平坦である。堆積土は 2 層に分けられる。1 層は焼土粒や地山ブロックを含む暗褐色シルト、2 層は地山ブロックを多く含む暗褐色シルトで、いずれも人為的埋土である。遺物は出土していない。

【SK 14 土坑】

東半部の北東側に位置する（第 7 図、図版 5 － 5）。北東側は削平を受けている。他の遺構との重複はない。平面形は不整な隅丸方形を呈し、規模は長軸 125㎝、短軸 110㎝である。深さは検出面から 52㎝である。断面形は擂鉢状である。壁は底面から緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は 4 層に分けられる。1 層は焼土粒や地山ブロックをわずかに含む暗褐色シルト、

2層は地山ブロックを多く含むにぶい黄褐色粘土質シルト、3層は明黄褐色粘土、4層は酸化鉄を層状に含む灰黄褐色粘土である。1・2層は人為的埋土、3層は崩落土、4層は底面直上に認められる機能時の自然堆積層である。遺物は出土していない。

【SK16土坑】

東半部の南東側に位置する（第7図、図版5－6）。他の遺構との重複はない。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸82㎝、短軸62㎝である。深さは検出面から18㎝である。断面形は皿状である。壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は焼土粒や木炭粒、地山ブロックを含むにぶい黄褐色シルトで、人為的埋土である。遺物は出土していない。

(4) 溝跡

西半部北側で1条（SD19溝跡）、東半部東側で2条（SD5・6溝跡）をそれぞれ検出した。SD5溝跡を除き、いずれも調査区外に延びている。

【SD5溝跡】

東半部の中央にある東西方向の溝跡である（第5図・第8図、図版5－7）。西端は徐々に浅くなって途切れる。東側は削平されている。SB15建物跡、SK4土坑、SD6溝跡と重複し、SK4土坑より新しく、SB15建物跡より古い。またSD6溝跡との重複部分は削平されているため、新旧関係を確認できない。しかし、SD5溝跡の堆積土は削平されている部分より東側には認められず、後述するSD6溝跡がこの削平部分でL字状に屈曲するとみられるために、SD5溝跡はSD6溝跡より古いことが想定される。検出総長は約9.3mで、上幅は33～243㎝、下幅は8～147㎝、深さは最大18㎝である。断面形は扁平な逆台形状である。方向は東で北へ約4°偏する。堆積土は3層に分けられる。1層は焼土粒、木炭粒や地山ブロックを含むにぶい黄褐色粘土質シルト、2層は地山ブロックを含む灰黄褐色粘土質シルト、3層はにぶい黄褐色シルト質粘土である。1・2層は人為的埋土、3層は崩落土である。

遺物は堆積土から非ロクロ土師器坏片・甕片、須恵器坏片・壺片（第9図－7）・甑片（第9図－8）・甕片が出土している。このうち、非ロクロ土師器坏は外面に手持ちヘラケズリが施され、内面はヘラミガキの後黒色処理されている。非ロクロ土師器甕には、内外面ヨコナデが施されているもの、外面にヘラケズリ、内面にヘラナデが施されているもの、底部に木葉痕が認められるものがある。須恵器坏は切り離し不明で、底部に回転ヘラケズリが施されている。須恵器壺（第9図－7）は体上部破片である。最大径が肩部にあり、肩部で強く屈曲している。内面に漆とみられる皮膜が認められ、短頸壺か広口壺と考えられる。胎土には海綿骨針が含まれている。須恵器甑（第9図－8）は口縁部から体部にかけての破片である。口縁部から体部にかけて直立気味に立ち上がる。把手貼付後、貼付部分に手持ちヘラケズリが施されている。把手は剥落している。またこの貼付部分に沈線3条が巡っている。胎土には海綿骨針が含まれている。須恵器甕は外面に平行タタキが施されて、内面に無文当て具痕が認められる。

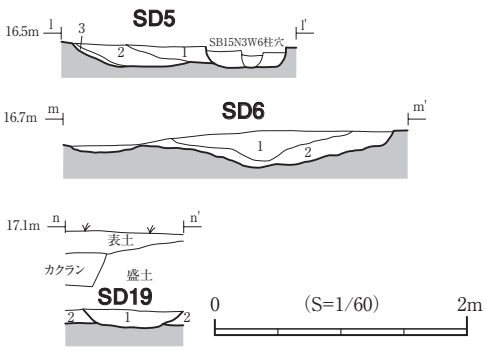
【SD６溝跡】

東半部の東側にある南北方向から東西方向へ屈曲する溝跡である（第５図・第８図、図版５－８)。ＳＤ５溝跡との重複部分でＬ字状に方向を変える。南側と東側はそれぞれ調査区外に延びている。ＳＢ17建物跡、ＳＤ５溝跡と重複し、ＳＢ17建物跡より古く、ＳＤ５溝跡より新しいとみられる。検出総長は約15mで、上幅は94～280㎝以上、下幅は74～220㎝以上、深さは最大29㎝である。断面形は扁平な逆台形状である。底面は多少凹凸がある。方向は南半では北で東へ約10°偏し、屈曲後の北半は東で北へ約８°偏する。堆積土は２層に分けられる。１層は焼土粒、木炭粒を含む暗褐色シルトで下部は炭を層状に含む。２層は地山ブロックをやや多く含む暗褐色粘土質シルトで、いずれも人為的埋土である。

遺物は堆積土から非ロクロ土師器坏・鉢・甕、ロクロ土師器鉢・甕、須恵器坏・蓋・壺・甕、磨石とみられる石製品、粘土塊などが出土している（第９図－１～4)。このうち、非ロクロ土師器坏（第９図－１）は外面が口縁部にヨコナデ、体部から底部に手持ちヘラケズリされ、内面はヘラミガキの後黒色処理されている。無段で底部は丸底である。非ロクロ土師器鉢は内外面にヘラミガキされ、黒色処理されている。非ロクロ土師器甕（第９図－２）は口縁部から体上部にかけての破片である。体部に丸みを持ち、最大径は体部中央にある。頸部は屈曲し、外傾しながら短く立ち上がる。外面は口縁部ヨコナデ、体部はナデの後に粗いヘラミガキが施されている。内面は口縁部ヨコナデ、頸部から体部はヘラナデが施されている。須恵器坏（第９図－３）は静止糸切りによる切り離しの後、体下端部から底部周縁に手持ちヘラケズリが施されている。内面の底部と体部の境には沈線状にヘラ先痕がみられる。須恵器蓋（第９図－４）は外面体部に沈線が施されており、つまみはリング状である。内面には擦痕が認められる。胎土には海綿骨針が含まれている。

【SD19溝跡】

西半部の調査区北西隅にある東西方向とみられる溝跡である（第５図・第８図)。両端とも調査区外に延びており、一部の検出である。他の遺構との重複はない。検出総長は2.1mで、上幅は88㎝以上、下幅は53㎝以上、深さは最大19㎝である。断面形は浅い皿状である。方向は東で南へ約14°偏する。堆積土はしまりのあまりない黒褐色シルトで、自然堆積である。遺物は出土していない。



SD５

層	土　　色	土　性	備　　考
1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	焼土粒・木炭粒・地山ブロックを含む。人為堆積。
2	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	地山ブロックを含む。人為堆積。
3	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト質粘土	崩落土。

SD６

層	土　　色	土　性	備　　考
1	暗褐色（10YR3/4）	シルト	焼土粒･木炭粒を含む。下部に炭を層状に含む。人為堆積。
2	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	地山ブロックをやや多く含む。人為堆積。

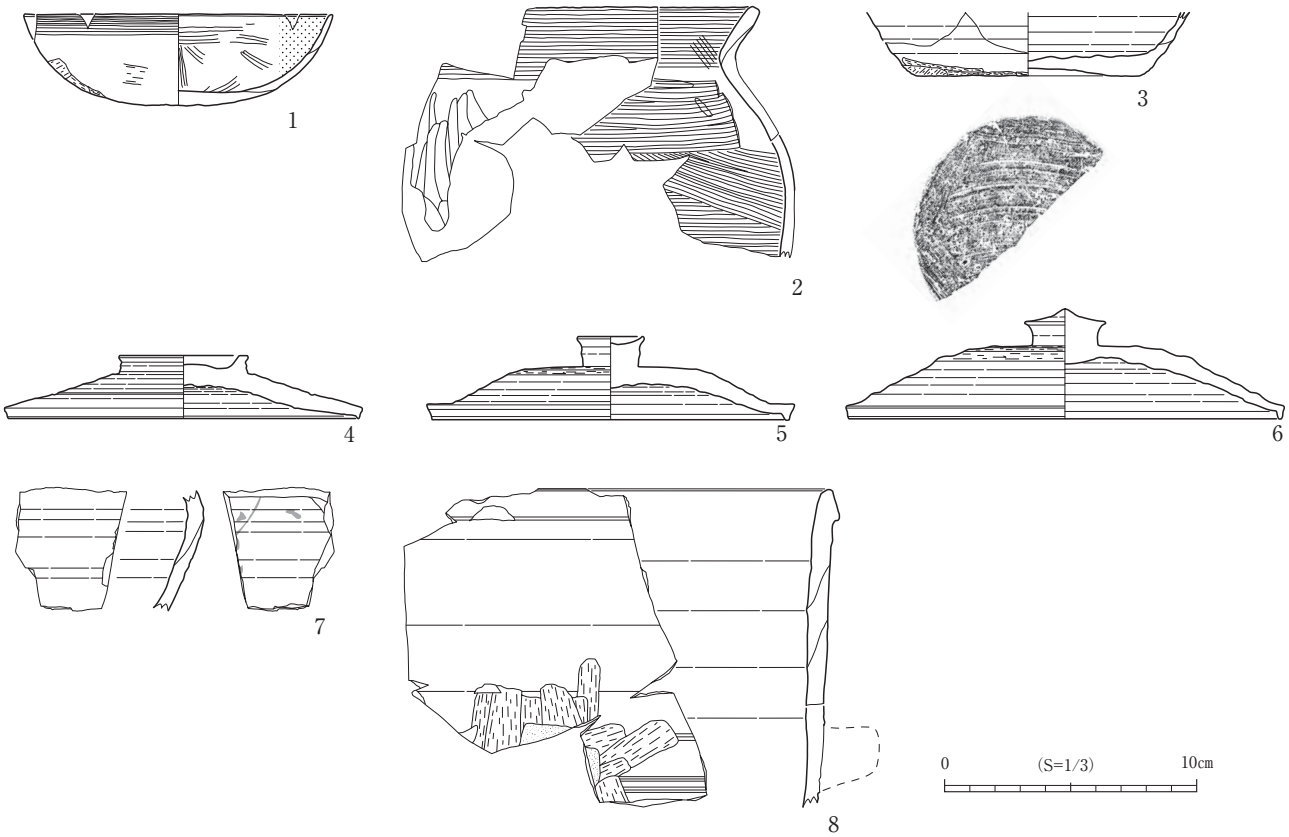
SD19

層	土　　色	土　性	備　　考
1	黒褐色（10YR2/3）	シルト	下部に地山ブロックを含む。
2	暗褐色（7.5YR3/4）	シルト	地山漸移層。

第8図　溝跡断面図

(5) ピット

調査区全体にわたり、58 個のピットを検出した（第 5 図）。柱痕跡や柱抜き取り穴が認められるものや、土坑状のものがある。このうち柱痕跡や柱抜き取り穴が認められ、柱穴となる可能性があるピットには、一辺 70 ～ 90㎝の隅丸方形または隅丸長方形を呈し、柱痕跡が径 14 ～ 20㎝の円形のものがある（P10・11・60・61）。これらについては、組み合わせは不明であるが掘立柱建物跡の柱穴になる可能性がある。



No.	器　種	遺構 / 出土層位	残　存	法　量（cm）			特　　徴	写真図版	登録
				口径	底径	器高			
1	土師器　坏	SD6　堆積土	1/4	(12.4)	－	3.6	外：ヨコナデ　体下部～底部手持ちヘラケズリ　内：ヘラミガキ→黒色処理　内外面マメツ	図版 6-1	R-6
2	土師器　甕	SD6　堆積土	口縁部～体上部破片	－	－	－	外：口縁部ヨコナデ　体部ナデ→粗いヘラミガキ　内：口縁部ヨコナデ　頸部～体部ヘラナデ	図版 6-2	R-5
3	須恵器　坏	SD6　堆積土	体下部～底部1/2	－	8.8	－	外：ロクロナデ→体下端部手持ちヘラケズリ　底：静止糸切り→周縁手持ちヘラケズリ　内：ロクロナデ	図版 6-3	R-4
4	須恵器　蓋	SD6　堆積土	ほぼ完形	14.1	－	2.5	リング状つまみ　内外：ロクロナデ　つまみ径 5.2cm　外面体部に平行沈線 1 条　胎土に海綿骨針を含む　転用硯?	図版 6-4	R-3
5	須恵器　蓋	SK7　堆積土	1/2	14.6	－	3.3	扁平な擬宝珠形つまみ　外：ロクロナデ→天井部回転ヘラケズリ　内：ロクロナデ　つまみ径 2.2cm	図版 6-5	R-7
6	須恵器　蓋	SK10　堆積土	3/4	17.4	－	4.3	擬宝珠形つまみ　外：ロクロナデ→天井部回転ヘラケズリ　内：ロクロナデ　つまみ径 3.2cm	図版 6-6	R-8
7	須恵器　壺	SD5　堆積土	体上部破片	－	－	－	内外：ロクロナデ　内面漆皮膜?　胎土に海綿骨針を含む　短頸壺 or 広口壺	図版 6-7	R-1
8	須恵器　甑	SD5　堆積土	口縁部～体上部破片	－	－	－	外：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ　把手貼付部に沈線 3 条　内：ロクロナデ　把手剥落　胎土に海綿骨針を含む	図版 6-8	R-2

第9図　土坑・溝跡出土遺物

Ⅳ．ま　と　め

１．遺物について

遺物の出土量が少なく、図示したものは非ロクロ土師器坏１点・甕１点、須恵器坏１点・蓋３点・壺１点・甑１点である。このため土器の分類はせずに、個別にその特徴や周辺遺跡などの類例から年代の検討を行っていくこととする。

【土師器】

ＳＤ６溝跡出土坏（第９図－１）は非ロクロ調整であり、無段で底部は丸底である。底部から口縁部にかけて 1/4 ほど残存している。外面が口縁部にヨコナデ、体部から底部に手持ちヘラケズリが施されている。内面はヘラミガキの後黒色処理されている。一里塚遺跡では第 33 次調査区ＳＫ3305 土坑、第 47 次調査区ＳＩ44 住居跡から、このような無段丸底で内面に黒色処理が施されている坏が出土している。第 33 次調査ではこのような特徴の非ロクロ土師器坏を含めた土器群に７世紀後半から８世紀前半頃の年代が与えられている（佐久間・山田・吉野 2003）。第 47 次調査では、同様に７世紀後葉から８世紀初頭頃の年代が与えられている（三好・藤村 1999）。また周辺の遺跡ではないが、仙台市下ノ内遺跡ＳＩ21 住居跡から、この坏の特徴に類似する坏が出土している。仙台市下ノ内遺跡ではこのような特徴の非ロクロ土師器坏を含めた土器群が７世紀後半から８世紀初頭頃の年代に位置づけられている（篠原・吉岡 1990）。これらのことから、この坏の時期は７世紀後葉から８世紀初頭頃と考えられる。

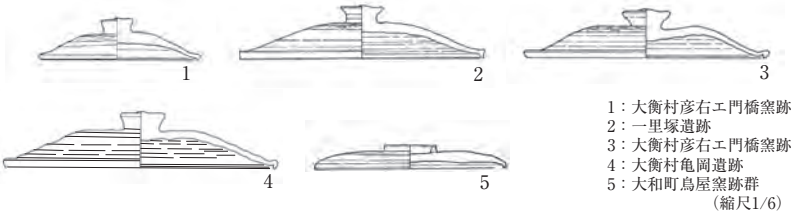
ＳＤ６溝跡出土甕（第９図－２）は非ロクロ調整であり、口縁部から体上部にかけての破片資料である。体部に丸みを持ち、最大径は体部中央にある球胴甕である。頸部は屈曲し、外傾しながら短く立ち上がる。外面は口縁部ヨコナデ、頸部から体部はナデの後に粗いヘラミガキが施されている。内面は口縁部ヨコナデ、頸部から体部はヘラナデが施されている。一里塚遺跡第 47 次調査区では、調整は異なるが口縁部の形態が類似した甕がＳＤ33 区画溝跡、ＳＤ50 河川跡から出土している。年代はＳＤ33 区画溝跡が７世紀後葉から８世紀初頭頃、ＳＤ50 河川跡はこれ以降とされている（三好・藤村 1999）。また、県北部を中心とした一般集落ではこのような球胴甕が８世紀代まで存続することが知られていることから、今回出土の甕の時期は大きく７世紀後葉から８世紀代と捉えておきたい。

【須恵器】

ＳＤ６溝跡出土坏（第９図－３）は底部から直線的に外傾して立ち上がる逆台形状を呈する。底部から体部にかけて 1/2 ほど残存している。底部の切り離しが静止糸切りで、底部周縁は手持ちヘラケズリにより再調整されている。また、内面の底部と体部の境には沈線状にヘラ先痕がみられる。切り離しが静止糸切りで、底部周縁が手持ちヘラケズリにより再調整されている類例として、色麻町日の出山窯跡群（古川・太田 1993）、大衡村萱刈場窯跡出土坏がある。このうち、内面の底部と体部の境に沈線状にヘラ先痕がみられる特徴を持つものは、大衡村萱刈場窯跡Ａ地点ＳＲ２・３窯跡出土坏に類例が認められ（村田 1995b）、８世紀中葉頃と考えられる。

蓋はＳＫ７・10 土坑、ＳＤ６溝跡から出土している。ＳＫ７土坑出土蓋（第９図－５）は、口縁部が

外反し、端部は下方に折れ曲がる。天井部は扁平で、つまみは扁平な擬宝珠形である。1/2 ほど残存している。高台坏、または双耳坏に組み合うものとみられる。外面天井部は回転ヘラケズリにより再調整されている。内外面に火襷痕、重ね焼き痕、内面に使用痕が認められる。つまみの形状がやや異なるが、扁平な天井部で口縁部が外反し、端部が下方に折れ曲がる特徴を持つものは、大衡村彦右ェ門橋窯跡 SK1 土坑出土蓋（第 10 図－ 1）に類例が認められ（高橋 1996）、8 世紀末から 9 世紀初頭と考えられる。



第10図　須恵器蓋の比較

SK10 土坑出土蓋（第 9 図－ 6）は、口縁部が外反し、端部は下方に折れ曲がる。天井部は扁平で、つまみは擬宝珠形である。坏、または高台坏に組み合うものとみられる。外面天井部に回転ヘラケズリにより再調整されている。内外面に重ね焼き痕、内面に灰かぶりが認められる。ロクロ目がシャープであり、稜になっている。一里塚遺跡第 25 次調査区 SD2541 溝跡から、つまみや口縁端部の形状が類似する蓋が出土している（第 10 図－ 2）。一里塚遺跡第 25 次調査では SD2541 溝跡出土の土器が 8 世紀後半から 9 世紀初頭頃に位置づけられている（佐久間・山田・吉野 2003）。また口縁部やつまみの形状がやや異なるが、口径や器高が同様なものは、大衡村彦右ェ門橋窯跡出土蓋（第 10 図－ 3）に類例が認められ、8 世紀末から 9 世紀初頭と考えられている。大衡村亀岡遺跡第 1 次調査（東北学院大学考古学研究部 1979）では、口縁部が短く下方に折れ曲がり、つまみが擬宝珠形の蓋（第 10 図－ 4）が出土しており、その後の調査成果により年代は 9 世紀初頭前後に位置づけられている（村田 1995a）。これらのことから、この蓋の時期は 8 世紀末から 9 世紀初頭と考えられる。

SD6 溝跡出土蓋（第 9 図－ 4）は、口縁部が外反せずに天井部から直線的に口縁部に至り、端部は下方に短く折れる。天井部は扁平で、つまみはリング状である。ほぼ完形である。小型の坏に組み合うものとみられる。外面体部に沈線が施されている。また内面に擦痕が認められることから、転用硯の可能性がある。胎土には海綿骨針が含まれる。つまみがリング状で、外面体部に沈線が施されているいわゆる金属器模倣の特徴を持つものは、大和町鳥屋窯跡群三角田南地区 1 号窯跡出土蓋（第 10 図－ 5）に類例が認められ（東北学院大学考古学研究部 1975）、8 世紀前半から 8 世紀中頃と考えられる。焼成、胎土も類似することから、この窯跡の製品である可能性が高い。

SD5 溝跡出土壺（第 9 図－ 7）は体上部の破片資料である。最大径が肩部にある短頸壺、あるいは広口壺とみられ、肩部で強く屈曲している。内面に漆とみられる皮膜が認められる。胎土には海綿骨針が含まれている。一里塚遺跡第 47 次調査区 SI15 住居跡から、内外面に漆が付着している壺とみられる口縁部破片が出土している（三好・藤村 1999）が、今回出土の壺の時期は大きく 8 世紀代と捉えておきたい。

SD5 溝跡出土甑（第 9 図－ 8）は口縁部から体部の破片資料である。口縁部にかけて直立気味に立ち上がる。把手貼付後、この部分に手持ちヘラケズリが施されている。把手は剥落しているが、把手部分には沈線が 3 条巡る。胎土には海綿骨針が含まれる。一里塚遺跡第 47 次調査区 SD33 溝跡から、

外面ヘラケズリ、内面ヘラナデが施されている甑が１点出土している（三好・藤村 1999)。体部に沈線が巡る特徴を持つものは、大和町鳥屋窯跡群三角田南地区２号窯跡出土甑に類例が認められ（東北学院大学考古学研究部 1975)、８世紀前半から８世紀中頃と考えられる。

以上のことから、図示した遺物の時期は７世紀後葉から９世紀初頭頃までであり、概ね一里塚遺跡の主体の時期に収まるものである。

２．遺構について

検出遺構は、掘立柱建物跡、柱穴列、土坑、溝跡、多数のピットである。各遺構の規模や特徴から分類などを行い、重複関係をもとに遺構の変遷について検討した後に、各遺構の年代や性格について若干考察する。

(1) 特徴

【掘立柱建物跡】

８棟検出した掘立柱建物跡（ＳＢ１・２・15・17・18・20・21・22 建物跡）は、建物の方向が北に対して東へ 22 ～ 30° 振れる建物跡（ＳＢ１・２・15・17・18 建物跡：Ⅰ群）と、建物の方向が北に対して東へ１～４° 振れる建物跡（ＳＢ20・21・22 建物跡：Ⅱ群）に分けられる。さらに、Ⅰ群の建物跡は柱穴が一辺 60 ～ 90cm の隅丸方形または隅丸長方形を呈する建物跡（ＳＢ１・15・17・18 建物跡：Ⅰａ群）と、柱穴が 33 ～ 62 cm の円形基調の建物跡（ＳＢ２建物跡：Ⅰｂ群）に細分される（第１表)。なお、ＳＢ17 建物跡は建物規模や方向から、ＳＢ15 建物跡と同様に桁行５間、梁行４間の四面廂建物跡になる可能性が考えられる。

【柱穴列】

２条検出した柱穴列（ＳＡ３・９柱穴列）のうち、ＳＡ３柱穴列はＳＢ15・17 建物跡の方向や柱穴掘り方平面形に類似していることから、Ⅰａ群を構成するものと捉えられる。なお、前述の通り柱穴列が北側に展開し、ＳＡ３柱穴列がⅠａ群を構成する建物跡になる可能性もある。ＳＡ９柱穴列はＳＢ１建物跡と方向が同じであることから、この建物跡に伴う足場穴や床束となる可能性が考えられる。さらに他に組み合う遺構がないことからⅠ群を構成するものと捉えられる（第１表)。

【土坑】

９基検出した土坑（ＳＫ４・７・８・10・11・12・13・14・16 土坑）は、不整な平面形を呈するも

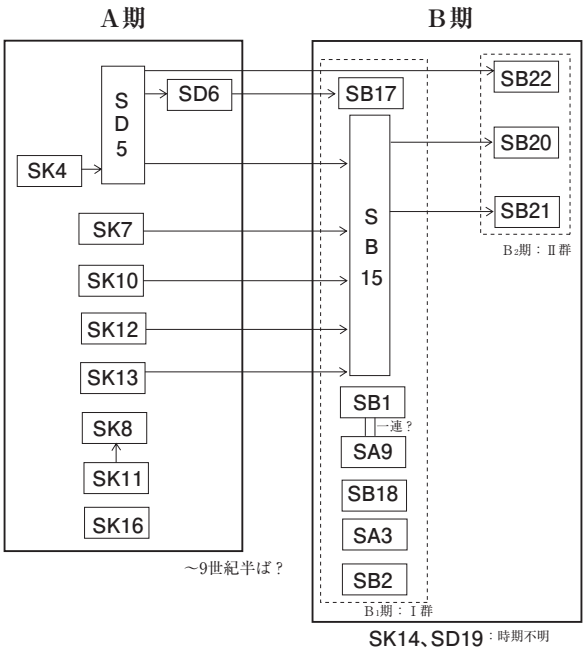
遺構番号	建物群	規模（東西×南北）	方　向	柱間寸法（東西 m・南北 m）	柱穴平面形	柱穴の平面規模・深さ（cm）　（cm）	柱痕跡の形状	柱痕跡の規模（cm）	備　　考
SB1	Ⅰ	2間×2間	N-29° -E	2.9～3.0・2.4～2.9	隅丸方形、長方形	一辺60～90・4～34	円形	径17～22	総柱建物
SB2	Ⅰ	1間以上×1間	N-22° -E	2.2・2.5	円形、不整円形	径33～62・30～43	円形	径18	
SA3	Ⅰ	東西5間	E-27° -S	2.0～3.2	隅丸方形	一辺60	－	－	
SA9	Ⅰ	南北3間	N-28° -E	1.5～1.9	長楕円形	長軸44～57、短軸29～35・18～23	円形、隅丸方形	径12～17、一辺12	SB1の足場穴or床束
SB15	Ⅰ	5間×4間	N-28° -E	2.3～3.1・2.7～2.9	隅丸方形、長方形	一辺70～90・14～35	円形	径14～22	四面廂建物
SB17	Ⅰ	2間以上×4間	N-30° -E	2.9～3.0	隅丸方形、長方形	一辺60～90・16～31	円形	径17～20	三面廂建物
SB18	Ⅰ	1間以上×2間	N-27° -E	2.5～3.9	隅丸方形	一辺80・25～27	－	－	
ＳB20	Ⅱ	3間×1間以上	N-1° -E	1.9～2.1・2.2	不整円形、長楕円形	径30または長軸70、短軸30・17	円形	径18	
SB21	Ⅱ	2間×1間以上	N-2° -E	1.5～1.6・2.1	円形、不整円形	径22～26	円形	径10～13	
SB22	Ⅱ	2間×4間	N-4° -E	1.1～1.2・1.8～2.3	円形、不整方形	径30または一辺30～40・33～46	円形	径10～16	

第１表　掘立柱建物・柱穴列一覧表

のがほとんどであるが、検出面からの深さが6～18 cmと浅いもの（SK4・7・10・11・12・13・16土坑）と、検出面からの深さが42～52 cmと深いもの（SK8・14土坑）に分けられる。このうち、SK4・7・8・10・11・12・13・16土坑は、いずれも人為的に埋め戻されており、埋土の特徴も類似していることから、ほぼ同じ時期に埋め戻されている可能性が考えられる。

【溝跡】

3条検出した溝跡（SD5・6・19溝跡）のうち、SD19溝跡は西半部で検出し、SD5・6溝跡は東半部で検出した。SD19溝跡の断面形は浅い皿状であり、自然堆積である。SD5・6溝跡の断面形はいずれも扁平な逆台形状であり、人為的に埋め戻されている。またSD5・6溝跡は、SK4・7・8・10・11・12・13・16土坑の埋土の特徴と類似しており、これらの土坑の廃絶時期とほぼ同じ時期に埋め戻されている可能性が高い。



第11図　遺構変遷図

(2) 変遷

検出した遺構のうち直接重複関係があるものを整理すると、Ⅰ群の建物跡はSK7・10・12・13土坑やSD5・6溝跡より新しく、Ⅱ群の建物跡より古い。細分したⅠa・Ⅰb群には直接重複関係がないため新旧関係は不明であり、Ⅰa・Ⅰb群が同時存在していた可能性もある[註1]。さらに、Ⅰ・Ⅱ群にも出土遺物による明確な時期差は認められないことから、遺構期はおもに土坑、溝跡で構成されるA期、建物跡で構成されるB期（B_1：Ⅰa・Ⅰb群・B_2：Ⅱ群）の大きく2期の変遷が想定される（第11図）。

(3) 年代・性格

前述した出土遺物の年代や、今回の調査区の南約80mに位置する第44次調査区（第12図）の調査成果とも比較しながら、各遺構期の年代や遺構の性格について検討する。

A期の遺構であるSK4・7・8・10・11・12・13・16土坑、SD5・6溝跡のうち、出土遺物の時期を検討した遺構はSK7・10土坑、SD5・6溝跡である。遺物はいずれも人為的に埋め戻された土からの出土である。図示した遺物の時期は7世紀後葉から9世紀初頭頃までであるが、SD6溝跡からはロクロ土師器の小破片もわずかながら出土している。これらのことから、廃絶時期は9世紀代であるとみられる。しかし近接の第44次調査区では、官衙に関連すると考えられている施設の時期が8世紀後葉から9世紀中葉頃とされ（三好・藤村1999）、さらに「正倉院」の西側に位置する集落が、報告書が未刊行のため詳細は不明であるが、7世紀末から9世紀にかけて存続してい

たと考えられていることから、A期の遺構は9世紀後半には下らず、それ以前には埋め戻されている可能性が考えられる。なお黒川郡衙の「正倉院」とみられる建物群は遅くとも9世紀初め頃には火災によって廃絶している（佐久間・山田・吉野 2003）ことから、A期の遺構がこれらの建物群の廃絶とほぼ同時期の9世紀初め頃に埋め戻されている可能性も考えられる。

A期の遺構のうち、土坑はほとんどが不整な平面形を呈し、検出面からの深さや断面形の形状が一様ではない。さらに、底面に凸凹が認められるものもあり、遺構としての性格は不明である(註2)。溝跡は断面形が一様でなく、底面に凸凹が認められ、自然流路とみられる。なお第44次調査区では、土坑5基、溝跡6条を検出しているが、いずれも今回の調査区で検出した土坑、溝跡との間では、規模や方向に共通性が認められず関連は明らかではない。

第12図　今回の調査区と第44次調査区の遺構全体図

Ｂ期に位置付けられる遺構はＩ・Ⅱ群の掘立柱建物跡、柱穴列やピットである。いずれも遺構に伴う遺物が土師器・須恵器の小破片であるか、あるいは全く出土していないため、時期は特定することはできない。第44次調査区で確認された建物跡はほとんどが真北を基準に配置されており、Ｉ群の建物跡が同じ時期の遺構である可能性は低い。また、Ｉ群のうちＩａ群の建物跡の柱穴掘り方平面形はしっかりとした角が付かない隅丸方形・隅丸長方形であり、壁は底面から緩やかに立ち上がり、斜めになっているものが多い。さらに掘り方埋土にあまりしまりがなく、掘り方の規模に対して柱痕跡の規模が小さい。また柱筋もあまり揃わないことから、これらの建物跡が古代の官衙に関連した遺構とは考えにくい。このため、Ｉ群の建物跡の時期は中世以降であることも考えられる。一里塚遺跡第25次調査区や第33次調査区などでは中世以降とみられる建物跡を検出している（佐久間・山田・吉野2003）が、柱穴掘り方平面形や規模に共通性が認められず、Ｉ群の建物跡との比較はできない。

中世以降で柱穴掘り方平面形が、Ｉａ群同様に隅丸方形・隅丸長方形となる類例は、大衡村梅木遺跡で検出した近世のＳＢ107掘立柱建物跡がある（吉野1998）。ＳＢ107建物跡は同じ位置で１度建て替えられているが、いずれも柱穴は隅丸長方形で、一辺がそれぞれ50～70㎝（新）、60～90㎝（旧）である。周辺の遺跡ではないが、石巻市沢田山西遺跡では、柱穴掘り方平面形が長方形となる近世のＳＢ37掘立柱建物跡を検出している（須田2004）。

また、大衡村梅木遺跡では前述したＳＢ107建物跡の南西約25ｍの位置で、桁行３間、梁行２間の身舎の四面に廂の付くＳＢ79掘立柱建物跡を検出しており、時期は近世以降と推定されている（吉野1998）。

今回の調査成果だけでは、Ｉ群の建物跡の時期を特定することはできないが、大衡村梅木遺跡や石巻市沢田山西遺跡で検出した建物跡の類例や、撹乱からの出土遺物に近世の煙管吸口（図版６－９）があることから推定すると[註3]、建物跡の時期は近世まで下る可能性もある[註4・5]。Ⅱ群の建物跡はほぼ真北を基準としているが、第44次調査区で確認された建物跡と柱穴の規模や掘り方平面形が異なり、さらにＩ群の建物跡より新しいため、古代の官衙に関連した遺構の可能性は低く、また、建て替えが認められないことから、短期間利用された建物跡であるとみられる。

これら以外の遺構については、時期・性格ともに今回の調査成果からは明らかにすることができない。

このように検出遺構の時期、性格ともに明確にできない点が多く、今後の調査の進展を待ちたいが、このうち、Ａ期の遺構は出土遺物の年代観などから、9世紀半ばには廃絶した可能性がある。遺構として機能していた期間は、一里塚遺跡の主体となる時期と矛盾するものではなく、黒川郡衙が機能していた時期に並行する遺構であった可能性も考えられる。B_1・B_2期の遺構の時期についてはいずれも確定ができないが、近世以降に下る可能性がある。

註１　側柱建物跡であるＳＢ２建物跡は、Ｉａ群の建物跡よりも建物の規模や柱穴掘り方平面形がⅡ群に類似する。従って時期もⅡ群により近い可能性があり、Ｉｂ群がＩａ群より新しく、Ⅱ群より古いことが推定される。

註２　栗原市伊治城跡の第33次発掘調査では、平面形が楕円形や不定形な土坑（ＳＸ693･669土取り穴）、一側縁は直線状であるが、片側が不整形をなす溝状遺構（ＳＸ666土取り溝）を土取り遺構として検出している（安達・千葉2007）。Ａ期の遺構のうち、ＳＫ４・７・10・11・12・13土坑は、平面形が類似していることから土取りのための土坑である可能性がある。

註３　全長5.0㎝、羅宇側の端部径1.0㎝の煙管吸口である。口付部がつぶれ、欠損している。緑青がふいており表面が腐食しているが、「肩付」の痕跡とみられる一段高い部分が、羅宇側の端部から2.2㎝ほど認められる。このことから、この煙管吸口は１８世紀前半以前の特徴を持つ煙管吸口である可能性がある（古泉1987）。

註４　文政６年（1823年）の「黒川郡今村御絵図」（以下「絵図」）には、今回の調査区周辺が描かれている。「絵図」には調査区南側を北西・南東方向に走る現在の県道吉岡・鶴巣線と思われる箇所に、脇街道とみられる道が描かれており、方向もほぼ現在の県道と同じである。Ｉ群の建物跡は現在の県道とおおよそ同じ方向であることから、「絵図」の道ともほぼ方向が揃うことが考えられ、これもＩ群の建物跡が近世以降であるという傍証になろう。

註５　ＳＢ１建物跡とＳＢ15建物跡との建物間の距離は約12ｍ、ＳＢ15建物跡とＳＢ17建物跡は約6m、ＳＢ１建物跡とＳＢ18建物跡は約3mであり、Ｉａ群の建物跡には完数尺を使用した規則性が窺われる。

引用・参考文献

青森県史編さん考古部会　『青森県史』資料編　考古４　中世・近世

安達訓仁・千葉長彦　2007　『伊治城跡−平成 18 年度：第 33 次発掘調査報告書−』　栗原市文化財調査報告書第４集　栗原市教育委員会

吾妻俊典　2005　「奈良時代における多賀城の土器」『古代の土器研究　聖武朝の土器様式』　古代の土器研究第８回シンポジウム資料

氏家和典　1957　「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第 14 輯　東北史学会

江戸遺跡研究会　2001　『図説　江戸考古学研究事典』（柏葉房株式会社）

大衡村史編纂委員会　1983　『大衡村史』

古泉　弘　1987　『江戸の考古学』

斎藤吉弘　1990　「天皇寺遺跡」『寂光寺跡ほか』　宮城県文化財調査報告書第 135 集　宮城県教育委員会

佐久間光平ほか　1993　『上野館跡―近世茂庭氏居館跡発掘調査報告書―』　宮城県文化財調査報告書第 156 集　宮城県教育委員会

佐久間光平・山田晃弘・吉野　武　2003　『一里塚遺跡―吉岡東官衙遺跡―』　大和町文化財調査報告書第 12 集　大和町教育委員会

佐藤憲幸　1997　「彦右ェ門橋窯跡」『舟場遺跡ほか』　宮城県文化財調査報告書第 173 集　宮城県教育委員会

佐藤憲幸・小野章太郎　2007　「旧大衡役場前遺跡」『東北地方整備局関連遺跡発掘調査報告書』
宮城県文化財調査報告書第 211 集　宮城県教育委員会

佐藤　信　2007　『日本史リブレット８古代の地方官衙と社会』（山川出版社）

篠原信彦・吉岡恭平　1990　『下ノ内遺跡―仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書Ⅱ―』
仙台市文化財調査報告書第 136 集　仙台市教育委員会

進藤秋輝ほか　1994　『下伊場野窯跡群』多賀城関連遺跡発掘調査報告書 19 冊　宮城県多賀城跡研究所

須田良平　2004　「沢田山西遺跡」『沢田山西遺跡ほか―三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅲ―』
宮城県文化財調査報告書第 196 集　宮城県教育委員会

須藤　隆・今泉隆雄・坪井清足編　1992　『新版古代の日本』第九巻東北・北海道（角川書店）

大和町　1975　『大和町史』上巻

大和町　1977　『大和町史』下巻

高橋栄一　1996　「彦右ェ門橋窯跡」『下草古城跡ほか』　宮城県文化財調査報告書第 169 集　宮城県教育委員会

手塚　均・加藤明弘　1989　「一里塚遺跡」『亘理町三十三間堂遺跡ほか』　宮城県文化財調査報告書第 131 集　宮城県教育委員会

手塚　均・加藤明弘・岩見和泰　1990　「一里塚遺跡」『寂光寺跡ほか』　宮城県文化財調査報告書第 135 集　宮城県教育委員会

東北学院大学考古学研究部　1975　「鳥屋窯跡群三角田南地区発掘調査報告」『温故』９号

東北学院大学考古学研究部　1979　「亀岡遺跡発掘調査報告」『温故』12 号

奈良文化財研究所　2003　『古代の官衙遺跡　Ⅰ遺構編』

奈良文化財研究所　2004　『古代の官衙遺跡　Ⅱ遺物・遺跡編』

藤沼邦彦・菊地逸夫・小川　出　1985　『中峯遺跡発掘調査報告書』　宮城県文化財調査報告書第 108 集　宮城県教育委員会

古川一明・太田　肇　1993　『日の出山窯跡群』　色麻町文化財調査報告書第１集　色麻町教育委員会

真山　悟　1989　「彦右ェ門橋窯跡」『亘理町三十三間堂遺跡ほか』　宮城県文化財調査報告書第 131 集　宮城県教育委員会

三好秀樹・藤村博之　1999　『一里塚遺跡―第 44・47 次発掘調査報告書―』　宮城県文化財調査報告書第 179 集　宮城県教育委員会

村上裕次・志間貞治・尾形祐之　2009　『奥州街道・大衡一里塚ほか―仙台北部中核都市奥田地区工業団地開発事業関係遺跡調査報告書―』
大衡村文化財調査報告書第４集　大衡村教育委員会

村田晃一　1995a　『亀岡遺跡』　大衡村文化財調査報告書第１集　大衡村教育委員会

1995b　「萱刈場窯跡」『下草古城跡ほか』　宮城県文化財調査報告書第 166 集　宮城県教育委員会

2000　「飛鳥・奈良時代の陸奥北辺―移民の時代―」『宮城考古学』第２号　宮城県考古学会

大和幸生　2008　『原田・下萩沢遺跡―一般国道４号線築館バイパス関連遺跡調査報告書Ⅰ―』
宮城県文化財調査報告書第 219 集　宮城県教育委員会

山中敏史　1994　『古代地方官衙遺跡の研究』（塙書房）

結城慎一・佐藤　洋　1985　『仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書』　仙台市文化財調査報告書第 76 集　仙台市教育委員会

吉田　孝ほか　1994　『岩波講座　日本通史』第４巻古代３（岩波書店）

吉野　武　1998　『梅木遺跡ほか―仙台北部中核都市建設事業関係遺跡調査報告書Ⅰ―（第１分冊）』
大衡村文化財調査報告書第２集第１分冊　大衡村教育委員会

写 真 図 版

1. 調査区遠景（南東から）

白線部が調査区
※この空撮写真は宮城県黒川高等学校から借用したものである（平成８年撮影）

2. 調査区全景（南東から）

図版１　調査区遠景・調査区全景

1. 調査区東半部全景（西から）

2. SB1 建物跡、SA9 柱穴列
（北東から）

3. SB1 建物跡 N3W1 柱穴断面（北西から）

4. SA9 柱穴列 N1 柱穴断面（北西から）

図版２　調査区東半部全景・SB1 建物跡、SA9 柱穴列

1. SB15 建物跡（南東から）

2. SB15 建物跡 N2W1 柱穴断面（北西から）

3. SB15 建物跡 N3W2 柱穴断面（南から）

4. SB17 建物跡（南から）

5. SB17 建物跡 N5W1 柱穴断面（西から）

図版３　SB15・17 建物跡

1. SB2 建物跡（南から）

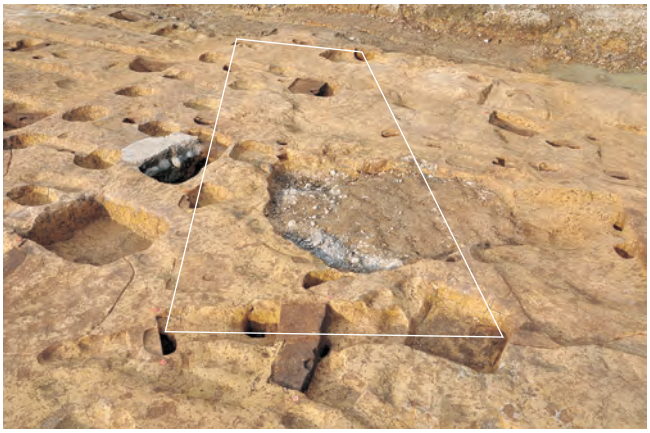
2. SB2 建物跡 N1W2 柱穴断面（西から）

3. SB20 建物跡（南から）

4. SB20 建物跡 N2W4 柱穴断面（西から）

5. SB21 建物跡（南から）

6. SB21 建物跡 N2W2 柱穴断面（北から）



7. SB22 建物跡（南から）

8. SB22 建物跡 N1W3 柱穴断面（南から）

図版４　SB2・20・21・22 建物跡

1. SK7 土坑断面（西から）

2. SK8・11 土坑、P123 断面（北から）

3. SK10 土坑断面（南から）

4. SK10 土坑須恵器蓋出土状況（南東から）

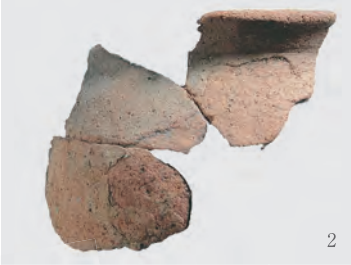
5. SK14 土坑断面（南から）

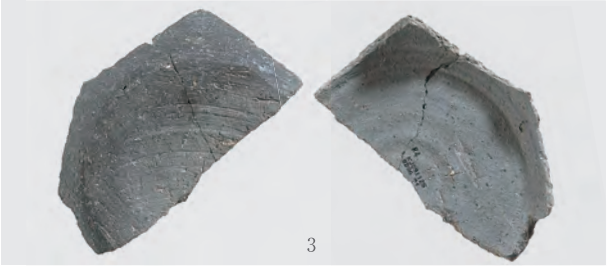
6. SK16 土坑断面（西から）

7. SD5 溝跡、SB15 建物跡 N3W6 柱穴断面（東から）

8. SD6 溝跡断面（南から）

図版５　SK7・8・10・11・14・16 土坑、SD5・6 溝跡





8

1～4：SD6 溝跡
5：SK7 土坑
6：SK10 土坑
7・8：SD5 溝跡
9：撹乱

1：土師器坏
2：土師器甕
3：須恵器坏
4～6：須恵器蓋
7：須恵器壺
8：須恵器甑
9：煙管吸口
9 のみ縮尺 1/2

図版６　出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	いちりづかいせき
書名	一里塚遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書
シリーズ番号	第224集
著者名	尾形祐之
編集機関	宮城県教育委員会
所在地	〒980－8423　宮城県仙台市青葉区本町3－8－1　TEL 022－211－3685
発行年月日	西暦2010年3月26日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
一里塚遺跡（いちりづかいせき）	黒川郡大和町（くろかわぐんたいわちょう） 吉岡字（よしおかあざ） 東柴崎（ひがししばざき）	044211	23019	38度 26分 22秒	140度 54分 20秒	2009.10.19 ～12.04	968㎡	高校実習棟建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
一里塚遺跡	集落跡	古代	土坑8基、溝跡2条、ピット多数	土師器・須恵器	溝跡から大和町鳥屋窯跡の製品とみられる須恵器蓋が出土している。
		時期不明	掘立柱建物跡8棟、柱穴列2条、土坑1基、溝跡1条、ピット多数	土師器・須恵器・煙管吸口など	

要約

一里塚遺跡は黒川郡大和町吉岡字東柴崎に所在する遺跡である。東西方向に延びる大衡丘陵と富谷丘陵を開析しながら東流する吉田川とその支流である善川との合流地点に張り出した河岸段丘面上に立地している。1988年度から1994年度までの調査により、7世紀末から8世紀前半の環濠集落、8世紀後半から9世紀初頭の区画施設を伴った掘立柱建物群などを発見している。これらの調査地点から北東に約700m離れている今回の発掘調査では、掘立柱建物跡8棟、柱穴列2条、土坑9基、溝跡3条、ピット58個を検出した。

遺構期として、A・B期に分けられる。A期の遺構には土坑8基、溝跡2条がある。これらの遺構は9世紀半ばには埋め戻されている。B期の遺構には掘立柱建物跡があり、Ⅰ・Ⅱ群に大別される。いずれも時期不明であるが、Ⅰ群の建物跡は近世以降の可能性がある。Ⅱ群の建物跡はⅠ群より新しいが、ほぼ真北方向を基準にしている。

出土遺物は土師器、須恵器、煙管吸口などがある。遺物の時期は7世紀後葉から9世紀初頭頃が主体であり、一里塚遺跡の中心となる年代に収まる。これらの出土遺物のうち、大和町鳥屋窯跡の製品とみられる須恵器蓋が出土している。

宮城県文化財調査報告書第 224 集

一 里 塚 遺 跡

平成 22 年 3 月 19 日印刷
平成 22 年 3 月 26 日発行

発 行　宮 城 県 教 育 委 員 会
仙台市青葉区本町三丁目8番1号

印 刷　有限会社　中 村 印 刷
宮城県加美郡加美町字一本杉 215